
こうもり池

朋次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こつもり池

【Nコード】

N4193M

【作者名】

朋次郎

【あらすじ】

昔話です……………

セイタはいたずら好きだ。そして好奇心旺盛だった。
ついでに足腰が丈夫だったのでもどこでも出歩いていた。
分校仲間のイチロといつもつるんで遊び歩いていた。

ある日山ブドウとアケビをたらふくくったあと、小さな池にでた。
ここらあたりはめったに行かないところだ。

イチロはいった。

「あ、ここ、こうもり池や。たたられるかの、早くいの、いの」
セイタはいった。

「はは、なんでやただの池や」

「あまえ知らなんだか、大昔のお侍がここで片目をとられて死んで
んで、

それ以来ここには片目の魚しかおらんで、こわいで」

「うそつけ、片目の魚しかいないなんてことあるか」

「セイタ、あまえこの話知らなんだか、おれ怖いからここを早いと
ことおつて

里におりる、そうしようや」

セイタはせせら笑った。ポケットから残った山ブドウを粒で出した。

「やあ、これで魚を釣ろうや、ほんとに片目の魚しかいないのか
実験してみようや、イチロ、ええな？おれは今からするで」

「食ったらたたられるぞ」

「片目やったら食わん。逃がしてやる、それでええやろ」

「・・・」

イチロも好奇心が出たのだろう、セイタの後ろにすわった。

セイタはおおいばりでズボンの縫いしろから糸を引っ張り出して
魚釣りをはじめる。

釣りは得意だからすぐに釣れた。

1 匹目・・・普通のコイの小さいのだが片目だった。

2 匹目・・・少し大き目、片目だった。

3 匹目・・・片目、開いた方の目でじろりとにらまれた。

4 匹目・・・片目。ひらりと身をひるがえしてセイタの手から自力で池にもどった。

5 匹目・・・やはり片目、くわっと大きな口をあけてセイタを威嚇する。

うしろにいたイチロが立ち上がった。

「セイタ、もうええやないか。おれもう怖いからかえるで」

セイタもさすがに不気味になった。

「そうやな・・・かえろうか・・・」

「ここは石1つ投げてもあかんの、お父ちゃんがそういうとった、石を投げると雨がふる、いうて」

「こんなええ天気でもか？うそつけ」

セイタは足元にある小さな石をひろって、ぼんと投げた。

とたんに池全体がわっと揺れた。

ひつと声をあげてセイタとイチロは里にむかって走る。

帰るまでに空が黒くなって大雨になった。

あれからもう70年たった。

筆者は村の古老からこの話を聞いて実際に池まで行ってみた。

こうもり池は今では整備されていて当時の不気味さはないが祠がまだあつてしめ縄もはられている。

片目の魚どころか生き物のいる気配もない真つ黒な池になっている。池の淵は落ち葉が重ねられていてさみしい雰囲気だった。

じつとしていると祠から人の視線を感じていくようで長居はできなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4193m/>

こうもり池

2011年10月7日13時12分発行